紙造形論　1　－紙造形の役割－

後　藤　聖　紀

本論は紙造形の社会的な役割について論じたものである。

紙とは文化発展の必須要素であり、その紙を作る紙造形は芸術の一分野であると同時に、文化の存在証明という役割を負っている。

旧来の紙造形に対する認識は、紙作りを応用して制作をする美術の一分野で、主に80年代前後のアメリカを中心に広がったムーブメントであり、自然と文明のつながりを主題とした、急進的なテクノロジーに対するカウンターカルチャーであったと位置づけられている。

しかし、そのような認識では不十分であり、本論の各章において紙造形の正当な位置づけを再定義する。

1章においては、紙作りとは人類の文明が存在している証拠であることを示す。

紙は石や木、布、革の代用品として発明された記録媒体で、これにより飛躍的な文明の発展をもたらしたことから紙は文明の必須要素と言える。しかし、紙が存在するだけでは証拠としては不十分である。人類が「紙を作る」という事を再現できて初めて証拠と言える。つまり、人類は紙を作り続ける事で自らの文明の存在証明を果たす事ができる。

2章においては、紙作りの中でも紙造形だけが永続的証明が可能な分野であることを示す。

紙は記録媒体としてだけではなく、日用品や工芸品など多岐にわたり利用されており、現状では製紙産業が存在するので改めて「紙作り」を再現する必要はない。だが、記録媒体や情報伝達という役割には将来的に代用品が生

まれると予想される。そして紙に対する需要がなくなれば製紙産業は成り立たなくなり、世の中から紙という存在はなくなってしまうだろう。しかし、紙造形は芸術という領域の中にあり、需要というものに影響されない。つまり、紙造形は永続的な文明の存在証明が可能ある。

3章においては、紙造形だけが紙作りを継承できる可能性を持っていることを示す。

芸術であれば紙造形に限らず紙作りを継承できる可能性があり、中でも身体表現に有効性があると判断できるが、現状においてはそのような活動の必要性はなく、今後登場することも期待できない。つまり、紙造形だけが紙作りを継承し更なる発展を期待できる存在である。

各章によって、紙造形だけが紙作りを継承し、永続的に人類の文明の存在証明を成し得ることを明確にし、本論の妥当性を示す。

序　これまでの紙造形

本論で取り上げる紙造形とは芸術活動の一つであり、またその活動により制作された作品を指す。一般にはあまり知られていない芸術分野で紙造形という名称だけでは明確には認識し難いかもしれないが、主な活動は紙作りの技術を応用して平面作品や立体造形などの美術品を制作することである。

粘土を主な素材とするクレイワークや、繊維を主な素材とするファイバーワークと並び、紙造形はペーパーワークとも呼ばれている。代表的な作家にはデイヴィッド・ホックニー（David Hockney）やロバート・ラウシェンバーグ（Robert Rauschenberg）、ジャスパー・ジョーンズ（Jasper Johns）等がおり、日本では黒崎彰があげられる。

これらの紙造形作品とペーパークラフトの様な紙加工の作品はよく似ている。紙加工には和紙を用いたデザインや工芸品などがあり、世間一般には紙

造形の方がなじみが薄いので紙加工の作品としばしば混同されて語られる事がある。

紙造形は原料のパルプを素材に用いるのが特徴であり、それによってシート状の紙に限らず様々な形態の紙を作る事が可能だ。紙加工など他の造形分野が出来合いの紙を用いるのに対して、紙造形は紙の原料から直接作品を作るという特殊な技術を要する分野である。

紙造形の起源はアーツアンドクラフツ運動に触発されたダード・ハンター（Dard Hunter）の研究活動で、そこからペーパールネッサンスというムーブメントが興り、後のペーパーワークへと繋がっていく。そして大きな変化のきっかけとなったのは、70年代ごろアメリカの版画家たちが上質の版画用紙を得るために紙を自作し始めた事だ。手漉き紙の自作は次第に紙作りの技法を応用したペーパーワークへと発展してゆく。1983年には日本で国際紙会議が開かれ様々なペーパーワークの作品や技法が紹介されるなどもし、80年代はアメリカを中心として世界規模にまでペーパーワークが発展していた。

当時はネオダダ、ポップアート、アースワークなどが注目を集めており、ペーパーワークはそれらのジャンルともつながりが深い。ペーパーワークと関わっていた理由は作家それぞれにあったようだが、当時のペーパーワークはそれだけ注目をされていた事をうかがわせる。

ペーパーワークが急激に発展した理由はいくつかある。主な素材であるパルプは、水素結合という微細な植物繊維が持つ特性によって接着剤を用いる事なく植物繊維と水分だけで成形可能な特殊な可塑性を有しており、そのパルプという素材の特殊さや面白さ、使い心地のよさが理由の一つにあげられる。

そして技法の目新しさと巧みさも理由の一つになるだろう。長い年月を経

て紙漉き職人たちの手によって洗練されてきた技術はそれだけで刺激的であった。手漉き紙と聞けば古臭く感じるが当時のアーティストにとっては全く未知の造形の可能性を秘めていた。

アーティストを魅了していた理由は目新しさだけではなく、改めて紙作りに関わる事で気づく事柄にある。紙作りは人が自然から文化を作り出すという原初的な経験をもたらし、人と文明と自然との関係の深さを知るきっかけとなるのだ。

確かに紙造形の始まりは単なる好奇心から始まったかもしれない。だが、アーティストたちは紙作りを体験する事で、紙が示す自然と文化の象徴的な側面を発見した。そしてそれがアーティストたちを魅了し、大きなムーブメントに発展していったのだ。

このようにペーパーワークは急激に発展したが、このような活動も90年代頃から急激に見かけなくなる。その理由は紙造形の源流がカウンターカルチャーだった事に由来する。

18～19世紀に起こった産業革命以後、手工業から機械工業へと移行していき品物の生産量は増加し多くの人の手に行き渡る様になったが、その一方で品物の質は低下していた。

生活自体は豊かになり多くの人々が新しい時代に満足していたが、古き良き時代には戻れないといった喪失感のようなものを感じていた事だろう。

そんな気運に抗うべくウィリアム・モリス（William Morris）によってイギリスでアーツアンドクラフツ運動が興る。これが後のペーパーワークにまで繋がってゆくのだが、生来カウンターカルチャーとしての側面を持つペーパーワークは60～80年代においても時代の潮流に抗う手段としてふさわしかったといえる。

紙造形は復興運動の一つとしてアーティストたちにもてはやされたが、時代は代わりカウンターカルチャーとしての役割は終わりを迎えた。それが同

時に紙造形が注目されなくなった理由でもある。

だが、現代においては「紙造形はカウンターカルチャーである」という位置づけはふさわしくないと筆者は考察する。そして紙造形の本来の役割は、人類の文明、文化が存在した証明であると主張する。以下の各章においてその妥当性を示したい。

1　紙は文明、文化の象徴

本章において紙作りが文明の存在証明となることを示す。

人がいつから描画を始めたのかは明確にはわからない。人類の祖先が描画をしていた痕跡として記録媒体が現存するのは石や木、粘土などを利用したものに限られる。

石材に文字や画像を刻み付ける記録方法は石材の堅さ故に困難ではあったが、数千年単位の記録保存が可能であった。木材などは虫食いや朽ちるなどの劣化が起こりうるが、加工も入手も容易で石材に比べて利便性のある素材だっただろう。木材以外にも竹材、布や革など容易に手に入る様々な物が利用されており、それらはいずれも記録保存には十分な素材であった。

記録保存の為なら石材や木材の様に多少重かったりかさばる事などは大きな問題にならないが、情報伝達の為となるとそれらは大きな障害となる。情報伝達が盛んになるには共通の言語等の登場も必須ではあるが、物質面では軽くてかさばらない表現媒体が求められてたと考えられる。

時代が進み、薄くて軽く嵩張らない紙が利用される様になると情報伝達に関する問題はおおむね解決する。紙は記録保存に関しても不都合な点は無く、石や木の代用品として紙が記録保存や情報伝達に広く利用される様になる。

石材や木材などの自然物はどこにでもたくさんあるので利用しやすい。また、石材は硬質で壊れにくく、古代文明などの記録は数千年経った現代でも保存されている。その代わり記録する手間も大きくなる為、利用は重要な文章もしくは格式の高い情報などに限られていただろう。

文明が発展するとともに保存しなければならない格式の高い文書も増え、また、日常的な文章のやり取りもより増える。そうなると記録保存よりも情報伝達に関する機能性が重要になってくる。

情報のやり取りが盛んになると、僻地で利用される事も出てくる。この場合、石材や木材などは物量が大きすぎて利用しにくくなるので情報量を減らし物量を抑えるしかないが、その場合は情報の詳細を伝えきれなかったり正確さに欠けることとなる。石材や木材を使っていた時代は情報量を減らさず、物量を減らす方法を求めていた。

情報量を減らさず、物量のみを減らす必要性だけではない。各地で文化が発展すると情報のやり取りが長距離化、広方向化し、やり取りの量や頻度も大きくなり、情報伝達の需要は増加の一途になる。そんな中で薄くてかさばらず、大量生産が可能な紙はこれらの問題を概ね改善できた。むしろ、紙を利用する事で文化の交流や文明の発展を促進できたといってもいいだろう。

紙の登場により文明は飛躍的に発展し、そして紙の上にその経験や情報を蓄積してきた。様々な情報を蓄積した紙の集積である書物などはまさに人類の文明の結晶であり、紙自体が文明の象徴といえる。

紙は人間だけが作れる特殊な物質で、「漉く」という工程が重要な意味を持つ。スズメバチやアシナガバチなども巣作りの際に紙と似たものを作るが、厳密には紙と言えない物質である。紙は自然に発生するという事はまずあり得ない。

一般的な紙は主に植物繊維からできており、用途に応じて様々な添加物が混ぜられる。そのため紙の定義には物質面での条件が含まれておらず、人の

目には明らかに違う物に見えても、構成されている組成を見ると木の皮などの自然物と区別し難い。

紙は人が記録保存、情報伝達の為に発明した人工物で自らの文明の発展の必須要素であり、人類の経験の集積でもありまさに文明の存在した証拠といえる。ただ、物質的な組成を見ると自然物との区別がしにくく、紙が存在しているだけでは十分な証拠と言えない。つまり、物質面以外で紙と自然物との区別の仕方を示す必要がある。

厳密には紙が文明の存在証明とするには紙が人工物と証明する必要がある。紙を電子顕微鏡などで調べてその紙から人為的な痕跡を見つけ出すという方法もあるが、その方法では科学的で大げさ過ぎる。美術という分野ではそのような方法は不毛である。本論では紙の製法を示す事が出来れば紙が人工物である事の証明は十分であり、これ以上の証明方法も無い。

製法を示す方法はいくつかあるが、必要な事はどうすれば紙が作れるかを的確に示す事である。仮に技法書の様な形で製紙方法を書き記したとしても伝えられる情報には限界がある。最も確実なのは実際に紙作りを再現する事である。

製紙の過程を映像として記録保存する事で、実際に紙を作らなくても的確に製紙方法を示すことは可能かもしれない。その場合、完成品の紙という物証が出来上がる事は無いが、技法書よりは明確に製法を伝える事が可能だろう。

だが、製紙の映像でもやはり決定的とは言えない。確実で決定的な証拠を示すには、実際に紙作りを再現し、完成した紙という物証を示す方法が最も証拠能力が高いといえる。つまり、人類は紙を作る事で確実に自らの文明の存在証明を果たす事ができる。

2　紙造形の永続性

前章では紙作りが文明の存在証明となることを示した。本章では紙造形が紙作りを永続的に継承出来ることを示す。

まず、紙作りが再現出来なくなる要因の一つとして物質的要因があげられる。紙の原料の不足や枯渇、高騰するなどして容易に入手出来なくなる場合だ。人が紙の消費量を調整しながら生産、利用するにしても、紙の主な原料である植物は環境変化の影響を免れない存在で、極端なケースでは完全に消滅する事も想定できる。

また、物質的要因以外に商業的要因がある。紙の代用品が登場したとすれば紙は当然不要となる。現在では、紙という代用品の登場によって、それまで記録媒体の主流であった石材や木材などを一切使わなくなった様に、今後優れた紙の代用品が発明されれば紙は必要なくなり生産されなくなる。

とはいえ、これらの問題は極端なケースで、植物がなくなるほどの環境変化は紙が作れない以上の問題であり、このような事態を想定して論を進める事は不毛と言わざるを得ないだろう。また商業的要因にしても、現状での紙の役割は多岐にわたるもので、その役割を全てフォローできる代用品というのは想像しがたい。今後、紙が作られなくなるという事は、全くあり得ない話ではないが、現状としては大きな問題とはいえない。

現状ではすぐさま紙作りがなくなる事は無く、今後も急激な変化は予想しにくく、当分の間、紙作りは続くといえる。故に現状では改めて紙作りを再現する必要は無い。

しかし、紙が無くなるという事態はいずれ直面する問題であり、その経緯について明確にしておく必要がある。

紙は記録媒体であり、そして表現媒体でもある。紙の最も重要な機能は単なる情報の保管にとどまらず他者に情報を伝達する役割である。

そして、それら記録保存や表現媒体以外にも日用品としても利用されており、紙製のデザインや工芸品などもある。

現状では記録媒体の代用品として電子機器やコンピューターなどのデジタル系の媒体が登場している。電子媒体は記録保存に関しては紙を遥かにしのぐ保存容量があり、表現性においても映像、音楽、動画などの保存が可能だが、閲覧するのに電源が必要となり紙の代用品としては一長一短である。当面の間は紙と電子媒体との併用になるだろう。

記録保存や情報伝達、日用品　デザイン　工芸品など数えればきりがないほど紙の役割は多く、紙の有効性は揺らぐ事はないようにみえる。

だが、紙の代用品はいずれ発明されると予想できるので、現状の問題としてではなく少し未来を想定した問題として考える必要がある。
紙の役割は多種多様で、それらを全てフォローできる様な万能の代用品は考えにくい。だが、一つ一つの役割にならば代用品は存在するし、むしろ、紙製品の方が代用品的な位置づけなので、紙でなければ勤まらない役割は少ないといえる。

部分的に紙より効率的な代用品が発明される可能性は十分ある。仮に部分的であったとしても紙の代用品が生まれれば紙の需要は少なからず減る。同様の理由で紙以前の記録媒体は現在では利用されなくなった。紙以前の記録媒体で自然物の類いは生産の必要がなく、消えてなくなるという事はないが、紙は需要がなくなれば生産されなくなってしまい、完全に世の中から消えてしまいかねない。

紙の役割は多く、また紙に対する親しみがあるので、仮に全ての役割をこなせる代用品が登場したとしても需要が極端に減ると言う事は無く、すぐさま紙がなくなるとは考えにくい。

ただ、部分的に代用品が登場するだけで産業には大きな痛手となりかねない。産業には一定量の需要が必要で、特に紙の役割の主軸である記録媒体や表現媒体としての役割に代用品が出たら残された日用品などの需要に関係な

く製紙産業は崩壊しかねないのだ。

しかし、紙の需要がなくなったとしても継続してゆく紙作りも存在する。

現状で紙作りをしているのは大きく分けて二つあり、一般的な製紙産業や伝統的製紙産業などの製紙産業と芸術の一分野である紙造形がある。

先に述べた様に、紙の需要が減少すれば産業は廃れてしまうだろう。伝統的製紙産業もその例外ではない。伝統的製紙産業の作るいわゆる和紙を必要とする分野では代用品が登場する事はないが、利用者が減少しているので需要自体も減少傾向にある。

それに対して紙造形は産業には含まれない。制作する目的は作家それぞれではあるが、紙を何かに利用する為や売買の為に作っているのではない。美術品としての売買も存在はするが制作動機が売買に基づく訳でもなく、紙造形自体は紙の需要に直接影響される分野とはいえない。

長い目で見れば紙の需要はいつかなくなるだろう。いつになる事かは判断できないが、ある程度の需要を保てなくなる時がくれば紙を一切作らないという結論を選ばなければならないし、それはさける事の出来ない事態であることも確かだ。

だが、芸術ならば需要の増減に影響されない。つまり、紙造形だけが永続的に紙作りを続けてゆける。

3　紙造形の有効性

2章では芸術に属する紙造形ならば永続的に紙作りを続けられることを示した。3章では芸術の中でも紙造形が技術の継承する為に最も有効な手段であることを示す。

紙造形が需要に影響されない理由は芸術という分野に属するからであり、

言い換えれば芸術は需要に影響されない分野だという事である。つまり芸術であれば紙造形に限らず他の分野でも他の形式でも存続の可能がある事を示唆している。

そもそも産業が廃れて芸術だけが残るというのは特殊な事ではない。印刷と版画が良い例で、木版印刷は銅版印刷の登場により描画精度の低い印刷技術となってしまい利用頻度は下がったが、木版による表現が一部の人々に愛され続けて木版画という美術の一分野となった。その後、銅版印刷も石版印刷の登場により銅版画という美術の一分野となる。このように産業が廃れ芸術的側面が残された技術は多数ある。

版画の様な例は美術だけではなく芸術全般に言えることだろう。各分野にマーケットは存在するが、産業の様に需要が無ければ存在できない分野ではない。

紙作りは継続し続けなければ証明にならない。製紙産業では永続的な証明は保証できないが、紙造形の様に芸術であれば永続的に証明していく事が期待できる。言い換えれば紙作りは紙造形に限らず芸術であれば継続の可能性があるということだ。

芸術であれば存続は可能だが、本来の目的は紙作りの継続であり技術の継承が可能な分野である事が必須条件となる。

他の芸術分野には身体表現、音楽、歌、語り、演劇、美術、ポエム、小説、映像表現などがあり、筆者はこれらの中から身体表現と映像表現が技術の継承に有効だと判断する。身体表現であれば紙を漉く動作を再現でき、映像表現であれば紙を漉く工程を記録に残すことができ、その記録から後世の人々が紙作りを再現できる。

ただ、これらの活動は現状では存在しない活動であり、筆者の仮説なので継承の可能性はこの限りではない事を付け加えておく。

身体表現では紙作りの作業を人が再現し、その動作を継承していく事が可

能なので概ね有効といえる。映像表現は技法書に比べればより明確に技術を伝える事が出来るかもしれないが、やはりそれでも単なる記録と何ら変わらず、複雑な技術の紙作りを映像を見ただけで再現できるとは考えにくい。

身体表現も技術継承という条件に関して充分でないが、紙作りに関しては実際に体を使って身につけてゆく身体表現の方が映像表現に比べて有効性があると判断できる。

身体表現と聞くと舞踏を連想するかもしれないが本論においては儀式や行事などの意味合いが強い。一般的には同列には置かないが、役割やその成り立ちはよく似ているといえる。

身体表現では実際に紙作りをする必要はないので、道具も材料も必要ない。簡単に言うならば紙作りの真似をするという事である。紙造形は原料がなくなれば存続は不可能となってしまうが、紙作りの真似であれば原料が手に入らなくなっても継続可能である。

とはいえ、紙の原料は植物からとれる植物繊維であり、植物であればほとんどの物が紙に出来てしまうので原料が手に入らないという状況は考えにくい。また、植物が無いというのは紙が無い以上の問題であり、紙の原料が無いという事態は想定する必要は無いだろう。

ここまでは筆者の仮説で、実際には紙作りの真似をしている身体表現や儀式、行事は聞いた事が無い。単に筆者の調査不足の可能性もあるが、材料が潤沢に存在している現状ではあえて紙作りを真似する必要性も無いので、そのような活動が存在するとは考えにくい。

本章では、紙造形以外の紙作りの継承の可能性を検証してきた。原料枯渇などといった状況によっては紙造形が継承できない可能性もあるが、紙造形には紙作りを継承するだけではない紙造形独自のメリットがある。

その一つに紙造形は使用可能な紙の生産も可能だという事があげられる。

製紙産業が廃れた後でも描画などの分野に紙の利用者が僅かに残っていると予想される。紙造形はそれら紙の利用者に紙を供給できる。

さらに一番重要な事は、単なる継承ではなく更なる紙作りの発展が望める事である。製紙産業は大量生産が基本であった為に技術の発展傾向が偏っており、一般的な利用方法の紙以外の形状や形質などの可能性は研究されていなかった。だが、紙造形はその未知の造形の可能性を追究する事ができる。

紙造形は紙作りの技術を継承し、紙作りの技術をさらに発展させる可能性も秘めている。また他の芸術分野による紙作りの継承も考えにくく、今後そのような活動が登場する可能性も少ない。つまり紙造形が紙作りの継承に関して最も有力で有意義な手段であるといえる。

結

各章において以下の主張の妥当性を示してきた。

1　紙とは文明の象徴であり、紙作りは文明の存在証明である。

2　紙造形は永続的な紙作りが可能である。

3　紙造形だけが、紙作りを継承できる可能性を有している。

そして、以上から導きだせる結論は以下の通りである。

将来、紙の需要がなくなり製紙産業が衰退してしまった場合、芸術という分野に属する紙造形だけが、紙作りを継承し後世の人々に自らの文明の存在証明を果たすことが出来る。

以上で紙造形の役割に関しての論は終結するが、人類が自らはどのように成長してきたのかを振り返る時、文明の存在証明は重要な意味を持っており、紙造形は重い役目を負っているといえる。筆者の主張であるこの結論を実際に紙造形が成し遂げるには、今後の更なる課題として紙造形作家の制作テーマに関する研究とそのテーマを具現化する為の技術研究の必要性があげられる。

参考文献

町田誠之　著　『紙の科学：トイレットペーパーから情報処理まで』身近な科学シリーズ　講談社　1974

柳橋真、黒崎彰、他著　『カラー　日本の工芸 8・紙』　淡交社　1978

吉岡　幸雄　構成　『別冊太陽・和紙』　平凡社　1982

国際紙会議実行委員会編　『国際紙会議 '83 報告書』　1983

社団法人国際芸術文化振興会編　『現代紙の造形・日本と韓国』展カタログ京都市美術館　1983

いまだて芸術館事業協力会編　『現代美術・今立紙展 '85』作品集　1985

桜井斉佳　著　『紙による造形性の研究』京都工芸繊維大学修士論文　1986

伊野町紙の博物館編　『INO 紙のことば』展カタログ　1988

黒崎彰　著　『紙の造形・その伝統と創造』　京都精華大学木野評論第 20 号　1989

日本紙アカデミー編　『国際紙造形展』カタログ　京都府京都文化博物館　1989

横浜美術館編　『版画芸術の饗宴 － ケネス・タイラーと巨匠たち：1963 － 1992』　1992

国立国際美術館編　『紙の世界』展カタログ　国立国際美術館　1995

滋賀県立近代美術館　『シガ・アニュアル '97－ 紙・生まれ変わる造形』カタログ　1997

いまだて芸術館事業協力会編　『今立現代美術紙展』作品集　1997

高知県立美術館編　『TOSA－TOSA'99 紙』展カタログ　高知県立美術館　1999

黒崎彰　著　『紙造形　紙作りから作品制作まで』すぐ役立つ美術レッスン 5　2000